

コラム 招聘研究員レポート

名前	所属	招聘期間
陳 小 法	浙江工商大学 東亜文化研究院 副院長	2014年6月30日 ~ 2014年7月20日
Yola Gloaguen	フランス国立高等研究院 建築史専攻 博士課程	2014年10月9日 ~ 2014年10月29日
楊 陽	華東師範大学 対外漢語学院 文芸民俗学専攻 博士課程	2014年9月28日 ~ 2014年10月18日
昞 曉 藝	ブリティッシュコロンビア大学 アジア学科	2014年12月1日 ~ 2014年12月19日
包 媛 媛	北京師範大学文学院 民俗学与文化人類学研究所 博士課程	2015年2月5日 ~ 2015年2月25日
戚 瓔 恩	漢陽大学校 中語中文学科 博士課程	2015年1月26日 ~ 2015年2月15日

非文字で繋がる文化交流

— 神奈川大学非文字資料研究センターでの研究感想 —

陳 小 法

(浙江工商大学東亜文化研究院)



2008年12月に、弊院（当時は浙江工商大学日本文化研究所）は神奈川大学非文字資料研究センターと学術交流の協定を結びました。その後、若手研究員の相互派遣、留学生の受け入れ、印刷物の贈呈など多岐にわたり、学術の交流活動を展開してきました。

そのおかげで、2014年6月30日から7月20日まで、訪問研究員として神奈川大学非文字資料研究センターで、『墨蹟を通しての杭州と日本の交流について』というテーマで研究活動を行うことができました。

墨蹟といえば、中日交流史の研究においては、最も生の資料と言っても過言ではありません。ですが、従来、墨蹟は博物館や美術館で展示されるものに過ぎず、その内容について、何が書かれているか、十分検討されてきたとはいえません。それだけではなく、日本国の重要文化財に指定されたものに、タイトルさえ適切なものとはいえないものもあれば、刊行された史料の中には、文意のよく通じないもの、字が誤読されたものもあります。そういう点から、いかに墨蹟が史料として重要なものであるかを再認識してもらえよう主張したいと考えています。

幸いなことに、日本では墨蹟の研究を中国より先に展開してきました、その代表の一人である西尾賢隆氏は「墨蹟学」まで首唱しました。墨蹟は歴史研究においていかに重要かを垣間見ることができます。

ご存知かもしれませんが、日本の重要文化財と国宝の中にも、杭州僧侶の墨蹟が多数あります。これらの非文字で繋がる文化交流の実態を解明することは、日本文化史・中日文化交流史において、大変意義のある作業であると思います。

主要な蔵品は以下の通りです。

1. 東京国立博物館 6件（国宝3件、重要文化財 以下重文3件）
 2. 京都国立博物館 1件（重文）
 3. 山形県致道博物館 1件（重文）
 4. 東京出光美術館 1件（重文）
 5. 根津美術館 1件（重文）
 6. 島山記念館 4件（国宝1件、重文3件）
 7. 永青文庫 1件（重文）
 8. 五島美術館 5件（国宝1件、重文4件）
 9. 静嘉堂文庫美術館 4件（重文）
 10. 徳川美術館 1件（重文）
 11. 常盤山文庫 4件（重文）
 12. 長野サンリツ服部美術館 1件（重文）
 13. 静岡県世界救世教 2件（重文）
 14. 大徳寺 1件（国宝）
 15. 龍光院 2件（国宝1件、重文1件）
 16. 鹿苑寺 1件（重文）
 17. 相国寺 2件（国宝1件、重文1件）
 18. 大通院 1件（重文）
 19. 東福寺 5件（国宝1件、重文4件）
 20. 長福寺 1件（重文）
 21. 天龍寺 1件（重文）
 22. 大和文華館 1件（重文）
 23. 大阪旧萬野美術館 1件（重文）
 24. 正木美術館 2件（重文）
 25. 神戸市立博物館 2件（重文）
 26. 神戸香雪美術館 1件（重文）
 27. 個人蔵 19件（重文）
- 総計：72件（国宝10件、重要文化財62件）



以上挙げた作品に対して、これまでも日本の研究者によって多少の先行研究がすでになされていましたが、問題点も少なくなかったようです。それで、今回は田上繁先生のご指導のもとで、神奈川大学図書館をはじめ、早稲田大学図書館、東京博物館、京都博物館、奈良博物館、日文研図書館などで墨跡の関係資料を調査して、もとの墨跡と十分に照合して、多くの基本資料を手に入れました。今後は、これらの資料をもとに、一つ一つ丁寧に照合しながら、文字の解説をはじめ、文意の分析を通して、資料価値を研究しようと思っています。

今回のチャンスを利用して、中島三千男先生、鈴木陽一先生、馬興国先生など先生方との懇談もでき、斬新な研究テーマも続々出てきました。自分の研究の一里塚とも言える研生活でした。

来日中、彦坂綾さんをはじめ、センターの事務室の方々に何から何まで手配をしていただき、本当に助かりました。どうもありがとうございます。宿舎の白楽寮も研究室ととても近くて、歩いて行けます。

最後に、留学生の姚琮さんにお礼を申し上げます。色々とお手伝いいただきどうもありがとうございました。

アントニン・レーモンドによる 戦前の住宅設計

— 東西文化統合の一例

Yola Gloaguen

(フランス国立高等研究所)



2014年10月9日から29日にかけて、神奈川大学の非文字資料研究センターに訪問研究員として滞在した。専門は日本の近代建築なのでホスト研究室は建築学科の内田青蔵研究室であった。その研究室には同じ専門の教員やスタッフ、学生たちが在籍し、さらに本研究にとって重要な資料が揃っていたことから、人間的にも研究に専念する上でも非常に良い滞在となった。

研究テーマ

本研究テーマはアントニン・レーモンドの戦前の住宅設計に関係するものである。この研究は博士論文として、本年(2014)末に提出する予定である。

アントニン・レーモンドは1888年にチェコに生まれた建築家で、22歳のときにアメリカに移住し、建築家として活動をはじめ、1916年(28歳のとき)にアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトと出会った。妻ノエミのコネクションで、ライトのアトリエであり住宅でもあったタリアセンで働くことになった。そして彼はライトに師事しながら、主に住宅建築にかかわり、ライトが情熱を傾けた日本美術にも魅了されていった。

1919年の正月、ライトに付き添って初めて来日した。1914年から設計が始まった帝国ホテルの基礎工事が進んでいるときであった。レーモンドは約一年間ライトの下で帝国ホテルの仕事をしていて、ライトとの関係が徐々に悪くなり、独立した。



レーモンドは来日以降、東京ゴルフ倶楽部や東京テニス倶楽部で、エリートが集まるコミュニティと交際を続けていたため、良い施主に巡り会うことができた。多くの

施主と出会った結果、さまざまな建築を設計する機会を得た。例えば、教会、オフィスビル、工場、大使館、住宅などである。本研究は其中で住宅にフォーカスしている。日本で活躍した外国人建築家レーモンドの創作過程における東西の文化の統合を研究する上で、住宅が最も良い素材であると判断したからである。本研究では、その統合の過程をもっともよく表しているのが、1933年の軽井沢夏の家だと位置づけている。

調査訪問の目的

滞在中の研究計画は以下の三点である。

一点目は博士論文のための資料収集で、レーモンドに依頼した施主に関する調査である。レーモンドは、東西文化の統合過程において建築だけではなく、人間関係が非常に重要な要素であると促えていた。その人間関係とは、一つは、事務所にいた日本人スタッフとの関係であり、もう一つは施主との関係である。さらに私的な交流のあった芸術や文化関係の人たち、例えば民藝運動のメンバーや我楽多宗というグループのメンバーとのものである。

二点目と三点目は将来の研究のための準備で、近代の住宅における家相の影響と民藝運動と建築の関係についての調査であった。そ

